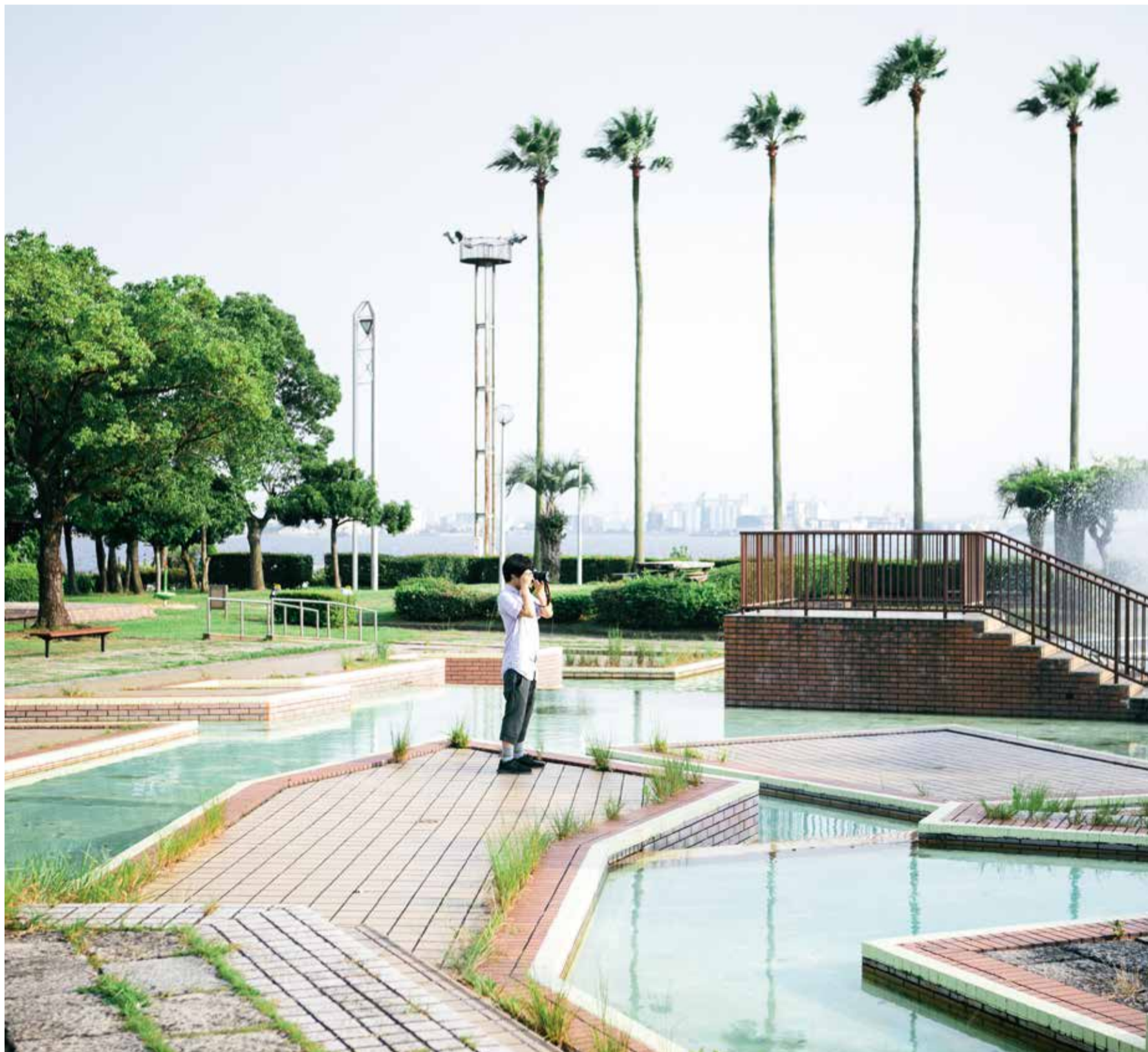


ポットラック新聞

the Summer

Vol.
10



特集

ぼったりが 恋しくて

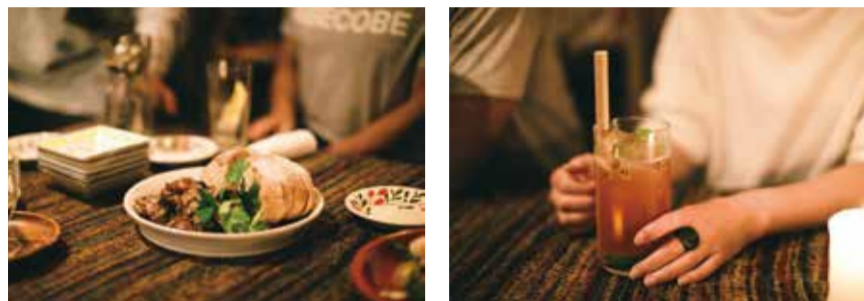
文：谷亜由子 撮影：三浦知也

「ぼったり」会うとは、思いがけない出会いや遭遇すること。使い慣れた言葉だけれど、あらためてその意味を確認してみると、記憶の中からいくつもその情景が脳裏によみがえってきた。ああ、「ぼったり」とはこんなにも味わい深いものだったのかと、懐かしさや恋しさにも似た渴望感がじわりと胸に迫ってきます。もしやここ数ヶ月、私たちの生活には心揺さぶる「ぼったり」が足りていないのかも？ そんな気がして、慌てて「ぼったり」を探しにまちへ繰り出してみることになりました。

「ぼったり名人」と
港まちを歩いてみる

「ぼったり」のことを考えていて、ふと思いついたのは、昨年、港まちで滞在制作をしたアーティストの蓮沼昌宏さん。ポットラック新聞第7号の特集「拾ってみる」のインタビューで、自らを「自動拾い機」と表現するほど、ふらっとまちを歩くだけで思いがけない出会いに恵まれる、まさに「ぼったり名人」のような人。一緒に歩けば、ぼったりに出会えるかもしれない！ そんな無茶ぶりともいえるオファーを、蓮沼さんはさらりと引き受けてくれました。

それにしても、なんとも心許ない今回のまち歩き。一抹の不安を胸に「どこに行けばいいでしょうね？」と声をかけると、「南極観測船！」と即答が。愛用のカメラを首に下げ、飄々とした足取りで歩き出す蓮沼さんの後に続き、一行は港まちづくり協議会のあるポットラックビルから、南極観測船ぶじが展示されている名古屋港ガーデンふ頭までの約1kmの道のりを出発しました。



店内のどこを撮影しても「らしさ」に溢れる「猫と窓ガラス」。意外な素材を組み合わせたノンアルコールのスペシャルカクテルは、お酒が得意でない人でも楽しめる満足一杯。料理がテーブルに登場すると、みんなの視線が一気に集中。決まったメニューがないから、ドリンクも料理も廣田さんにほぼお任せ。期待を裏切らないことを知るファンはそのワクワクを楽しみにやってくる。
【猫と窓ガラス】名古屋港区名港2-10-11 19:30頃～2:00頃 日曜休

ドもすく速いです。いい写真は自然に目を引くので探さなくても見つけられる。そこで自分の写真にばったり出会うみたいなのも、確率は低いけどありますね。
——面白いですね。このテーマが浮かんだとき、蓮沼さんだったらどんなふうにはばったりに出会うのか興味がありました。
蓮沼 住み慣れたまちのように、もう迷子になりようのない場所であって迷子になってみる、そんな感じに似てますね。でもどうすればそれが起こるかわからない。今日はもしかしたら南極観測船に行ったりすると迷子になれるかも、と書いていました。
——あえて迷子になる。それが蓮沼さんのばったりのイメージ？
蓮沼 たとえば落ち込んだ時のような、たまにまいつもと違う気分が陥ったときに、下を向いてしまったり、思わず足を止めて休んだり。無意識な行動をしたことでふと目に飛び込んできたも

の、それが僕のイメージする「ばったり」に近い感じですよ。
——自分の心持ちの違いで、見たものや出会ったものの印象が変わるみたいなことですね。
蓮沼 そうですね。たとえば今、こんな状況なので展示しても人が来ないですよ。でも無理に人を集めようとするよりも、さみしいと感じる自分の気持ちに逆らわず、自然なままにいる。そういう感覚が大事なかなと思います。困ったときは困ったままにしておくっていうのも、もしかしたらばったりに出会える可能性に近づける気がしますね。
アーティストとして、蓮沼さんはそんな「ばったり」が日常にたくさんあってほしい、とも。頑張ってる状態に素直に向き合うこと。すてきな「ばったり」に出会う秘訣は意外と身近なところにあるのだと気づかせてくれました。



猫と窓ガラスの「ばったり力」
さて、夜の港まちでもばったりを探してみました。人通りが途絶えた夜の港まちの一角に、今夜も小さな灯りがともる「猫と窓ガラス」は知る人ぞ知る港の人気店。決まった営業時間はなく、オーナーの廣田隆詳さんが一人で切り盛りするそのお店にはなんとメニューが存在していません。
「お酒？ それともお酒じゃないやつ？ お腹空いてる？ そうでもない？ 嫌いなものはあるかな？ ……」
廣田さんは、おしぼりを渡しながら、ササッとこちらの好み聞いてくれて、待つこと数分。やがて目の前に、初めて見る謎のカクテルと、見るからに美味しそうな料理のお皿が運ばれてきました。
「はい。これ、さくるとパッションフルーツをソーダで割ったやつ！ こっちはラム肉をブルーベリーとい

ちじくで煮込んでバルサミコで味つけたやつね」
早口でぶっさらばうな説明とは裏腹に、カクテルも料理も、口をつけたとたん丁寧な作られたことがわかる繊細な美味しさ！どれも予想外なのに大満足。
この店で今夜は何に出会えるか。そこが楽しいところだけど、毎回こうして料理を考えるのは大変そう。いそメニューを作ってしまったほうが楽なのでは？ そんな疑問を廣田さんにぶつけてみたところ、「ばつと見て、あるものでできるものを考えてるだけ。冷蔵庫の中に食材残したくないしさ(笑)」と、相変わらずのそっけなさ。同じことを別の日に聞いたら、きつとまた違う答えが返ってきてさうなのも廣田さんらしい。
人は、期待していたことが起きない状況をつい嘆きたくなるもの。けれど、いつもの自分をいつもどおりに生きている中に、思いがけずご褒美のように訪れる感動はもつと嬉しい。そんなことを感じた夜の港まち。廣田さんのまわりには今宵も楽しくて美味しい極上の「ばったり」があふれています！



船内で無心にシャッターを切る名人

強烈な日差しに照らされた真夏の港まち。焼けつくような暑さで思い出すのは毎年恒例の「みなと祭」です。残念ながら今年はお祭りさえも中止に。どことなく沈んで見えるいつもの道を行きながら、お馴染みの顔に出くわすこともなくあっさり南極観測船ふじに到着しました。
「中に入りましょう」。あまりの暑さに、いっときだけでも涼みたい一心でみんなを促し、船内。蓮沼さんは「ふじ」の内部に入るのは初めてとのこと。この日も、もし一人だったら外から眺めて引

き返そうと思っていたそうです。冷房の効いた船内に足を踏み入れたところで、ひとつ重大なことに気づきました。南極観測船は、乗組員同士でしか顔を合わせることのない閉じられた世界。しかも目的地は人間の住んでいない南極大陸。これは「ばつたり」からもっとも速いものの象徴では!? ……と蓮沼さんの方をうかがうと、そんなことなど意にも介さない様子で黙々と展示に目をやり、時折、思い出したようにカメラのシャッターをカシャカシャ。名人は、何を思い、何を撮っているのだろうか？ 気になることはいろいろあるけれど、後で聞いてみることにして船をあとにしました。

好きでない「ばつたり」もある

そのままガーデンふ頭を横切り、ほとんど人影のない、つどいの広場から凪いだ港を眺めてひと休み。かくして、期待していたような「ばつたり」には出会えないまま帰り道を歩き始めると、蓮沼さんがかつてドイツに暮らしていた時の思い出を聞かせてくれました。
蓮沼 フランクフルトにいたときは、街に出かけると知り合いにばつたり出会うことがよくあって、そういうのって、いいなと思ってたんですよ。
——蓮沼さんは、思いがけず知り合いに会う瞬間は好きですか？

蓮沼 うーん、どうかなあ。好きではないものもありますね。たとえば地元の美術館のよさな、よく行く場所。自分の庭みたいなところで知り合いに遭遇するとなぜか逃げたくなる(笑)。でもフランクフルトでは僕はよそ者だったので、そこで知り合いに会うのは、まさにだんだんと受け入れられていくような、自分の居場所になっていくみたいな感じがして、いいなって思うんでしょうね。
なるほど。蓮沼さんの気持ち、共感できるような気がします。今日は結局、誰にも会わなかったけれど、「ばつたり」は狙って見つかるとはないうと、みんな初めからわかってたことかもしれない。

名人に教わる、ばつたりの極意

ポットラックビルに戻り、蓮沼さんにあらためてお話を聞きました。
——ばつたりは、探しても見つかりませんでしたね。
蓮沼 僕は、はじめから、誰かに会う/会わないはあまり気にしてなくて、それよりも、ばつたりには前と後があるんだらうなっていう気がしていました。
——前と後？
蓮沼 そう。今日で言えば、僕にとつてのばつたりは南極観測船です。目的地であって偶然ではないと言われてしまいうただけど、一人だったら入らなかつたかもしれないのに、みんなと一緒だから入ることができた。それも偶然で、あそこに行く前とその後とは明らかにまらちの見え方が変わりました。観測船の中では速い南極大陸のことを意図せずと考えさせられていたし、これだけで、何度も通っている港の見え方が変わります。この違いがばつたりの前と後だと思っんです。
——道中、ファインダーを覗かずには何枚も写真を撮っていたのは？
蓮沼 実は僕、写真を撮る目的だけでなく、気持ちを楽しめるためにシャッターを押したりするんです。昔、気分がまいってしまつた時、ひたすらシャッターを押していたら気分が晴れたことがあって、それ以来、歩きながらリズムを取るようになりカシャカシャと。撮れた写真を見返すスビー



まち歩き中に蓮沼昌宏さんが撮っていた写真をいくつか紹介します。名人曰く「休憩した噴水のある公園のところが気に入っています。休憩中はばつたりの遭遇率が高い気がしています。何かの目的で動いていて、ふと気を抜いてやれやれって疲れて座り込んだところで目に入ったものは、ばつたり感がありますね」

「ばつたり名人」の
写真
蓮沼昌宏 (はすめま・まさひろ)
アーティスト、記録写真家。愛知県在住。
2019年に港まちポットラックビルで行った「MAT, Nagoya Studio Project vol.5」にて滞在制作。

展示紹介

み(ん)なとまちのアーカイブプロジェクト vol.5

「まちを残す」
People talk about what they do

2020年6月27日(土) - 10月3日(土)
港まちポットラックビル2F Project Space



港まちに関わる人々の語りの集積を展示し、まちづくりのヒントを探るプロジェクト第5弾。今回はコロナ禍を生きた人々の声をフィーチャリングしています。リアリティある数々のコメントは、現代社会に潜むさまざまな課題を再考するきっかけを与えてくれています。誰かの声に耳を傾け、その人の立場や自分の行動をもう一度考えてみるという基本的なイマジネーションの大切さを改めて感じる機会になりました。

ミナト・ノート

2020年6月27日(土) - 8月15日(土)
港まちポットラックビル3F Exhibition Space



MAT, Nagoyaは今年6年目を迎えます。これまでこの港まちに滞在し、制作・発表したアーティストら42名に、このコロナ禍での個々の状況について、また港まちの思い出の風景について質問し、アーカイブを行いました。彼/彼女らの創造的な活動や言葉を通じて、いまは遠く離れた人たちと、それぞれの場所から思いを巡らせる機会となりました。また、それぞれのテキストはノートのように製本して持ち帰ることができ、ウェブサイトでも公開しています。

Super Exhibition vol.2

「リトルビークル」
小さな乗り物／ガタンゴトン

2020年7月11日(土) - 8月22日(土) Super Gallery



撮影... 藤井昌美

リトルビークルはアーティスト・渡辺英司監修のアーティストブックやZINEを集めたプロジェクト。本を「Little Vehicle」=「小さな乗り物」としてとらえ、「作品を乗せて移動できるもの」として旅をするように各地で開催されてきました。今回はアムステルダムのアートブックショップ「Boekie Woekie」や、 아일랜드のリトルプレス「Coracle」などの貴重な本が並びました。会期中は、商店街と共にマーケットイベントも行いました。

幼稚園の時のお友達と

お母さんと弟とイオンに買い物に行った時、幼稚園の頃の友達とのお母さんに行ったり、でも、久しぶりすぎて恥ずかしくなってしまう話もできなかった。お母さんたちは久しぶりでもすぐ話ができて、すごいなと思った。
みく(8歳・小学生の女の子)

リサイクルショップで

「一番近いおばあちゃんの家」。今年の春、台湾のレジデンス滞在中にリサイクルショップに作品の素材を探しに行ったら、一緒にレジデンスに滞在していたポランドのアーティストとばったり。そこで何百円のものもを「一緒に買おう」という案。その人は自分も普段着る服とかを買って、「あ、お買い物上手ですね、なんか性格が見えた。」「いいですね」という驚きもある。展示前でイライラしていたのもある。突然のことにも感情表現が大きくなった。
山本聖子(30代・アーティスト)

オーバーオール
ママさんと

下の子を保育園に送ってから、仕事に向かうために地下鉄で築地口から六番町まで行くんですが、電車に乗る前にオーバーオールを着た、ショートカットでママチャリに乗ったおしゃべりなママさんを見かけたんです。オーバーオールが印象的で覚えていたんですが、六番町に着いて歩いていたら、さっきのママさんをまた見かけて、電車と同じスピードで移動していることにびっくりしました。
H.Y(30代・パート事務)

みんなの
ばったり

みなとまちに暮らすみなさん、そして、これまでみなとまちでの企画に関わってもらったアーティストたちに「ばったり」エピソードを聞きました。人それぞれのいろんな「ばったり」がありますね。

眠りから目覚めたら...!

僕、昼夜と関係なく、電車に乗ると寝ちゃうんですけど...。この間も座ったらとつとつと眠くなって、まず隣の人に寄りかかっちゃってて、起きて起きたら、急に名前を呼ばれて...。えーって起きたら、よく知ってるYちゃん、寝てるのを見られたら、めっちゃ恥ずかしなりました。
しむみん(60代・オルタナティブスペース運営)

水族館の裏の原っぱで

みなとまち滞在中のある日、水族館の裏にある原っぱに行くと、ネパールから来た15人以上の青年たちが車座になってビールとポップコーンで宴会を開いている場面に出会った。その原っぱは、大きな力で建設された水族館やショッピングセンターの裏にあり、装飾的なオブジェも案内板も見当たらないが、巨大な建物と対比して人々から忘れ去られたスポットのようで、その人数が集まって話せる場所として最高の環境に見えた。その場の盛り上がりは今、私が港の匂いとして認識するひとつになっている。
阿部航太(30代・デザイナー)

ばったりとは?

「ばったり」とはどんな仕組みなのか。分析心理学のユングが提唱した「シンクロニシティ」(共時性)の概念で「意味のある偶然の一致」、因果関係のなさそうなものが互いに惹かれ合う。互いに? 人にはそれぞれの現実と時間が流れていて、誰かの夢に誰かが登場しているのか。実は、誰かの必然性によって我々の時間が絡み合っている日常こそ、なんだか、ワクワクします。タイムマシンで過去や未来に旅するより、少し先の未来を思い描くから、ばったり、会えるんだろうな。
松本力(50代・アーティスト)

パチンコ好きの
おじいちゃん

港まちの喫茶店で出くわした、家に帰ろうとおじいちゃんを説得する中、学生くらの男の子と、近くのパチンコ屋にどうも行ったおじいちゃん、男の子は足の悪いおじいちゃん一人をおいてくのは心配で、押し問答を繰り返していた。どうやらおじいちゃんのパチンコ好きは昔では有名らしく、喫茶店のマスターは「行くぞあけなさいよ」とおじいちゃんを肩をもつ。喫茶店のちいさなミニニティから、まちの人々の関係性を妄想し、ひとりて笑いをこらえた。まちのこの感じ、羨ましいな、今でも記憶に残っている。
吉開菜央(30代・アーティスト)

ルシッド・ドリーミング

「ルシッド・ドリーミング」って知ってる? 夢を自分コントロールする方法で、以前、英語の先生がはまって話してくれていたけど、その時は興味もなく「へー」と聞いて、すっかり忘れていた。で、「コロナの間に不安なことが多くて、寝つきが悪くなると、普段通っている鍼灸の先生に「何かいい方法ないか」と聞いていたら、オスダの方法をYouTubeで送ってくれた。そしたら、それがルシッドドリーミングだった。「あ、これ知ってるー」と(笑)。で、試したら一回でできたよ。夢の中でジャブするのがすごく気持ちよかった。 たらはなひろし(50代・アーティスト)

久しぶりに行ったお店で

最近はや、出歩かないもん。でもこの間、久しぶりにNUCOにあんバターサンドとコーヒーを飲みに行ったら、いどさんに会った。行くといつもいるんだけどね。私のおばさんがいどさんとご近所らしくて、昔よく名前を聞いていてね。ここでお茶して話した時に名前も聞いてみた。名前が繋がるといいな。
もっちゃん(90代・手編みのおばあちゃん)

情報はバッチリと

ばったりかき、そんなあったかあ。こんなにかましましから誰かに会いそうなんだけど、会わないんだよなあ。よく行く喫茶店の常連さんには会うけど、うーん、でもコロナの情報はバッチリ入ってるよ!
竹ちゃん(70代・主婦)

マジックで塗った
カミキリムシと

これは僕が保育園の頃の話なんですけど、当時小学生だった兄が庭でなんかやつのを覗いていたら、カミキリムシをマジックで銀色に塗ってる。「なにしんの?」って聞いたら、「これ、塗ってるの?」次の日だったかな、2kmくらい離れた保育園の裏庭で遊んでたら、銀色のカミキリムシが10匹くらい集まって、1匹や2匹じゃないの。兄貴が塗ったカミキリムシしか思えなかった。
千葉正也(30代・アーティスト)

8人兄弟の1番下の弟と

義姉のお葬式の時に、妹がこっそり誘ってくれてみたいでびっくりしたよ。実家が山口で一度も名古屋に来たことがないからさ。会えたのも10年ぶりくらいで面影とかも昔のまんまで。それほどたくさんは喋ってないけどうれしかったね。 一夫のおねえちゃん(60代・手芸部員)

夕方に聴こえてきた歌声

アイスランドに滞在していた時、市民プールの帰りだったかな。手ぶらで散歩をしていて。そんな中、「すごく静かな夕方、茂みがあって、小さい公園」という状況で、10歳ぐらいの女の子4人が公園の中でちらび歌を歌っていて、しかも輪唱で。近づいたらちょうど終わってしまったんだけど、日常の風景にもかかわらず、それがパフォーマンスアートのように感じられて、すごくよかった。現実かフィクションの境目みたいな。そんな偶然の風景は鮮明に記憶に残るね。
鈴木悠哉(30代・アーティスト)

ある日の昼下がり

...ひくひく。何かの匂いを感じると、鼻をひくひくさせてしまうのが猫の性である。鼻先でぬるぬるの港の空気を感知しながら、流れ込んできたのはコーヒの香り。「お腹空いたかも」そう思い始めたその時、よく肥えた鳩が目の前でこちらを見つめていた。
ミミちゃん(3歳・ネコ)

素材とのばったり

毎日、仕事でものすごい量の古着や布を見ていたけど、1年半の産休後に仕事に復帰して久しぶりに古着に触れたら、布を触ることが自分の作品制作に影響していたんだと思えました。オンラインではできない、感覚的なことですよ。たくさん布を見て、これはいい布、これはそうじゃないものって。触り心地や匂い、見た目...そういう素材感をとらえる力が日常的に養われていたんだ。失われてしまったら、そのことに気づかなかつたりするの怖い。得るものあれば失うものあり、みたいな。 確井ゆい(30代・アーティスト)

コロナで会えなかった友人と

コロナで家族から外出しやダメだと言われ、なかなか会えず。いつも一緒に編み物とかしてる友達に3ヶ月ぶりに会えてうれしかったけど、足腰弱くなっちゃって。
みこちゃん(80代・手芸部員)

昔のショルダーバッグと

もう30年くらい前かな、高校生ぐらいに流行っていたヴィトンのバッグ。大須に娘と買い物に行ったら、赤と紺のヴィトンのショルダーバッグがたまたま並んでいて、盛り上がった。娘は「今も持っていてくれたら使えたのに」って、パールのときはこれを持ってほしい遊んでたな(笑)。 へっちゃん(50代・地域のおばあちゃん)

コンポストから畑で

大府市にスタジオを持っているのですが、下水道がなくトイレに困っていました。そこで、港まちガーデンをデザインされた四井真治さんからコンポストについて教えてもらって、使っています。できたコンポストは家庭菜園へある日、畑を耕していたら植えていたはずのミニトマト発見。しかも普通のミニトマトと細長いやつ。なんでだろう...と思っていたら、コンポストが元のやつ。まるで自分から生まれたように愛着が。なんだから自分にはばったり出会ったみたいでした。今は元気に3代目が育っています。
渡辺英司(50代・アーティスト)

記念に1枚パチリ!

ポットラックビルに来てみたら、昔から存じ上げていスペースのオーナーとばったり。そこは、表通りでは見かけることのないような面白いライブやワークショップが行なわれていた、自分にとって世界を広げてもらった場所でした。お会いできたことがうれしく、写真も一緒に撮って頂いたら、何となく自分とかぶっているところもあり。そのこともちょっとうれしかったです。
鼻毛(40代・保育士)

おじいちゃんの仏壇

コロナの感染予防で親と離れて暮らすため、以前おばあちゃんが住んでいた家にいます。その家におじいちゃんの仏壇があって、ご飯前にはいつも「チーン」してます。もともとそういう習慣はなかったけど、おばあちゃんももう94歳でコロナがかったら一発やるとか、親も疾患持ちちゃったりするから、おじいちゃんにお祈りしてます。僕が小学校上る前に亡くなったので、あんまり記憶ないけど、仏壇の写真でもこの機会に何度も顔を見れるのは、今できることやなって。
ヒスロム・吉田祐(30代・アーティスト)





文：古橋敬一 イラスト：遠山敦

第9回 コロナになっていじめなさい

只今、港まぢポットラックビルで開催されている展覧会(まぢを残す) People talk about what they doは、コロナ禍の人々の声を中心テーマになっ...

なぜ自分を責めるのか？

淡路咲奈ちゃん(8歳)とお話してきたのは、この展覧会が始まってから1週間が過ぎようとする7月3日の日本時間20時のこと。わざわざ日...

コロナになっちゃったら会えないから

その晩、誰もいないポットラックビルでパソコンを開き、Zoomにアクセスした。やがて画面には二人の少女が映し出された。明るく白い部屋、背景には大きな窓が見える。向こうの画面にもこちらが映ったのだから。少女にチャームクな笑顔が浮かんだ。え？なんて可愛い顔で笑うんだろう。と同時に、自分の表情が和らぐのを感じる。何かから切り出そうかと心配していた気持ちに、パッと光が差す。「こんにちは。咲奈ちゃんですか？はいじめまして、古橋と言います。どうぞよろしくお願ひします」

「こんにちは。淡路咲奈です。よろし



淡路咲奈ちゃん(8歳)とお話してきたのは、この展覧会が始まってから1週間が過ぎようとする7月3日の日本時間20時のこと。わざわざ日本時間などと書いたのは、現在、彼女はイスラエルに暮らしているから。このインタビューはイスラエルで夏休みの午後を過ごす彼女とZoom(インターネット)のビデオ通話サービスを介して行われた。実のところ、私は彼女に面識がなく、お母さんの珠美さんにも数回お会いした程度だった。しかし、その珠美さんのお姉さんの彩子さんと、港まぢのプロジェクトで共に働く間柄で、このコロナ禍の中でも、まさにネットを介した打ち合わせを何度も重ねていたところだった。インタビューに至ったきっかけを振り返ってみると、あれは4月23日。日本政府による緊急事態宣言が全国に拡大されて1週間が過ぎた頃。誰もが感染拡大の動向を気にしながら、それぞれの仕事や生活をやりくりし、世間には戸惑いと不穏な空気が漂っていたと記憶している。彩子さんを含めた数人のプロジェクトメンバーはびびりしてしまつた。咲奈ちゃんも悪くないじゃないかって。なんでこんなさいって言うんだろう、ってね。なんで泣いちゃったんだろう？覚えてますか？その時のこと。「はい、覚えてます。umm...その時みんなは元気で、でも、イスラエルはコロナが危なかった時で、みんなが外に出ないようにしていたから、umm...も自分がコロナになったら怖いなあと思って。それで、umm...(急に熱が出たから)コロナになつたかと思つて、心で、それで、umm...コロナになつてごめんねって泣いちゃったんだと思う」「会えないってのは誰に会えなくなっちゃうの？」「umm...家族とか...うん、家族です」「家族に迷惑かっちゃうなあ。会えなくなっちゃうなあって思つてちゃったんだ」「は、」「どうか...優しいね」「ふふふ。ありがとございます」

切ないようなたたまたまれない気持ちが出て、心臓をキョッとつかまれたような心地がした。海の向こうの小さな命の回復を祈りながら、その子が抱く自責とは何かという疑問が頭から離れなかった。翌日、幸いにして咲奈ちゃんは平熱近くに戻り、病状もコロナではなく普通の風邪だったことが判明。私たちは胸を撫で下ろした。しかし、それからもことあるごとに私は咲奈ちゃんの言葉を思い出した。心臓をつかまれたようなあの感触もすぐに消えそうにない。そして、なんで？という疑問は私の中に静かに沈殿し続けることとなった。子供は、世界の空気を吸い込んでしまふと同時に自分の等身大でそれを背負おうとする。その姿には、何か引き込まれるものがあり、思わず心が動かされてしまう。大人としては、その素直さに寄り添いたいし、何かできることがあれば、力になりたいと願う。しかし、そう願う一方で、このような考えにも思い至つた。子供たちが吸い込んでしまう世界の空気感とは、この社会が生み出すものだ。そして、その社会をカタチづけているのは大人の私たちだ。つまり、私はその空気を作り出している主体の側にいる。やがて私は複雑な自己矛盾を抱えてしまった。私の心臓をつかんでくれたのは自分自身の右手だったのだから。私はいつしか咲奈ちゃんに直接話を聞いてみたいと思うようになっていた。そして、そのインタビューの機会は、突然やつてきた。今年の展覧会の中心的なテーマがコロナになって、この街に関わるさまざまな人達にお話を伺つていく中で、彩子の恐怖に苛まれていたのかもしれない。咲奈ちゃんはお母さんと私の会話を聞きながら、「WHOが情報を隠したから」とか、「韓国の人たちの連帯感強いよね」と意見を述べた。大人同士の会話にも聴く耳を働かせて、自分の意見があればきちんと口を挟む。それは微笑ましく、そして頼もしかった。「娘のスクールでは、小学生はお互いの感じ方を話し合つたりしますが、中学生になると、コロナ禍で第三次世界大戦が始まつたらと仮定して自分の国をどう守るかという話し合いをしていくそうです。そして高校生たちは、夏休みの宿題にコロナに関わるいくつかの論文を渡されて、最愛の人がコロナになつた場合にそれをどう守るかということをもとめる宿題が出る。もうすごいなあと思つて。うちは特にインターネットショナルスクールということもあるでしょうが、各家庭で聞き取った各国の見方を子供たちが話し合つて、「そもそもは」って(笑)。面白いですよ」

「はい、とっても。正解が一つではない時代に求められるのは、自分たちで考えるという力。少なくとも3密を唱えているだけでは状況は変わらない。教育は本当に大切だと思つて」

※新型コロナウイルス感染防止策として隔離対象者が自宅から離れると携帯電話に警告が入る。ロックダウンが解除された現在は平常化。軍事システム駆用の社会実験という側面もあるとか。

「中国から始まつたので、最初はアジア人蔑視。買い物へ行くこと避けられるような感じでした。でも、すぐにイタリアが注目されたので、それが長く続いたわけではないんですが、まだその時は周りにマスクしている人がいないので、マスクしたくてもできないんですよ。目立つから。今は、もうあつという間に変わりました。公共の場でマスクは必須です。でも、こんな全世界がマスクをすることに悩んで考えられなかったですよ」

「umm...家にいると、たまに怒つちゃう時があるから、友達も近くにいるわけじゃないから(相談もできない)。そんな時にどうやって自分でも落ち着くことができるかってこと。例えば、好きなことをして気持ち切り替えるとか、いろいろ教えてもらいました。学校に行つた時は、コロナはまだ薬がない病だから気をつけましょうって、クラスでいろいろ話し合いました。イスラエル人はマスクに慣れてないから、すぐにとっちゃいます。特に、最近はずかしくてきたし。あ、コロナは

日本のインターネットショナルスクール、その系列なら幼稚園でさえも同様の動きがあつたと聞いている。そんな環境で育てばネットミーティングでの所作も自然に身につくのもかもしれない。「先生が算数とかの授業をしてくれから、毎日Zoomでミーティングをしてました。クラスのみならず一緒にやる授業もあれば、グループで分かれてやるのもあつて。umm...授業が終わつたら、友達とそのまま話したり、面白いビデオをつくったり。ビデオですか？咲奈のパソコンに映つてる友達のを撮つて、それを友達に送つたり、反対に咲奈に送つてくれて、見せ合ひしちゃったりして遊ぶんです。umm...ゲームもしましたよ。あ、咲奈の親戚、日本にいる従姉妹ともZoomして、「みんな元気？」ってよく話してました」

「umm...家族とか...うん、家族です」「家族に迷惑かっちゃうなあ。会えなくなっちゃうなあって思つてちゃったんだ」「は、」「どうか...優しいね」「ふふふ。ありがとございます」

「...その時に咲奈ちゃん熱が出た？」 「あ、はい。なんか熱が出て、咲奈は「コロナになつてごめんね」ってずっと泣いてただけよ。umm...はい、泣いてました」



「umm...家にいると、たまに怒つちゃう時があるから、友達も近くにいるわけじゃないから(相談もできない)。そんな時にどうやって自分でも落ち着くことができるかってこと。例えば、好きなことをして気持ち切り替えるとか、いろいろ教えてもらいました。学校に行つた時は、コロナはまだ薬がない病だから気をつけましょうって、クラスでいろいろ話し合いました。イスラエル人はマスクに慣れてないから、すぐにとっちゃいます。特に、最近はずかしくてきたし。あ、コロナは

「umm...家にいると、たまに怒つちゃう時があるから、友達も近くにいるわけじゃないから(相談もできない)。そんな時にどうやって自分でも落ち着くことができるかってこと。例えば、好きなことをして気持ち切り替えるとか、いろいろ教えてもらいました。学校に行つた時は、コロナはまだ薬がない病だから気をつけましょうって、クラスでいろいろ話し合いました。イスラエル人はマスクに慣れてないから、すぐにとっちゃいます。特に、最近はずかしくてきたし。あ、コロナは

「umm...家にいると、たまに怒つちゃう時があるから、友達も近くにいるわけじゃないから(相談もできない)。そんな時にどうやって自分でも落ち着くことができるかってこと。例えば、好きなことをして気持ち切り替えるとか、いろいろ教えてもらいました。学校に行つた時は、コロナはまだ薬がない病だから気をつけましょうって、クラスでいろいろ話し合いました。イスラエル人はマスクに慣れてないから、すぐにとっちゃいます。特に、最近はずかしくてきたし。あ、コロナは

「umm...家にいると、たまに怒つちゃう時があるから、友達も近くにいるわけじゃないから(相談もできない)。そんな時にどうやって自分でも落ち着くことができるかってこと。例えば、好きなことをして気持ち切り替えるとか、いろいろ教えてもらいました。学校に行つた時は、コロナはまだ薬がない病だから気をつけましょうって、クラスでいろいろ話し合いました。イスラエル人はマスクに慣れてないから、すぐにとっちゃいます。特に、最近はずかしくてきたし。あ、コロナは

「umm...家にいると、たまに怒つちゃう時があるから、友達も近くにいるわけじゃないから(相談もできない)。そんな時にどうやって自分でも落ち着くことができるかってこと。例えば、好きなことをして気持ち切り替えるとか、いろいろ教えてもらいました。学校に行つた時は、コロナはまだ薬がない病だから気をつけましょうって、クラスでいろいろ話し合いました。イスラエル人はマスクに慣れてないから、すぐにとっちゃいます。特に、最近はずかしくてきたし。あ、コロナは

自分たちで考える力を育て

コロナになつてからは自宅Vitual School、いわゆるインターネットによる遠隔授業を受けていたという。日本の小学校でもインターネットの導入が進んでいる私立の学校では、そうしたネット授業もあつたようだ。また

「...その時に咲奈ちゃん熱が出た？」 「あ、はい。なんか熱が出て、咲奈は「コロナになつてごめんね」ってずっと泣いてただけよ。umm...はい、泣いてました」



「umm...家にいると、たまに怒つちゃう時があるから、友達も近くにいるわけじゃないから(相談もできない)。そんな時にどうやって自分でも落ち着くことができるかってこと。例えば、好きなことをして気持ち切り替えるとか、いろいろ教えてもらいました。学校に行つた時は、コロナはまだ薬がない病だから気をつけましょうって、クラスでいろいろ話し合いました。イスラエル人はマスクに慣れてないから、すぐにとっちゃいます。特に、最近はずかしくてきたし。あ、コロナは

「umm...家にいると、たまに怒つちゃう時があるから、友達も近くにいるわけじゃないから(相談もできない)。そんな時にどうやって自分でも落ち着くことができるかってこと。例えば、好きなことをして気持ち切り替えるとか、いろいろ教えてもらいました。学校に行つた時は、コロナはまだ薬がない病だから気をつけましょうって、クラスでいろいろ話し合いました。イスラエル人はマスクに慣れてないから、すぐにとっちゃいます。特に、最近はずかしくてきたし。あ、コロナは

「umm...家にいると、たまに怒つちゃう時があるから、友達も近くにいるわけじゃないから(相談もできない)。そんな時にどうやって自分でも落ち着くことができるかってこと。例えば、好きなことをして気持ち切り替えるとか、いろいろ教えてもらいました。学校に行つた時は、コロナはまだ薬がない病だから気をつけましょうって、クラスでいろいろ話し合いました。イスラエル人はマスクに慣れてないから、すぐにとっちゃいます。特に、最近はずかしくてきたし。あ、コロナは

「umm...家にいると、たまに怒つちゃう時があるから、友達も近くにいるわけじゃないから(相談もできない)。そんな時にどうやって自分でも落ち着くことができるかってこと。例えば、好きなことをして気持ち切り替えるとか、いろいろ教えてもらいました。学校に行つた時は、コロナはまだ薬がない病だから気をつけましょうって、クラスでいろいろ話し合いました。イスラエル人はマスクに慣れてないから、すぐにとっちゃいます。特に、最近はずかしくてきたし。あ、コロナは

「umm...家にいると、たまに怒つちゃう時があるから、友達も近くにいるわけじゃないから(相談もできない)。そんな時にどうやって自分でも落ち着くことができるかってこと。例えば、好きなことをして気持ち切り替えるとか、いろいろ教えてもらいました。学校に行つた時は、コロナはまだ薬がない病だから気をつけましょうって、クラスでいろいろ話し合いました。イスラエル人はマスクに慣れてないから、すぐにとっちゃいます。特に、最近はずかしくてきたし。あ、コロナは

昔から山よりも海が好きで、今でもよく海の方まで散歩に行きます。ガーデンふ頭の大きな広場の先には2階建ての展望台があって、その下の日陰のベンチにコーヒーを持って散歩に行くのが好きですね。ふらりと寄ってくる猫と遊んだり、船が好きなので帆船なんか見れ

ガーデンふ頭の散歩道

まちなかコラム

港まちの方々が綴るそれぞれのストーリー。

Vol.10

松野伸哉

下郷洋子さんから←升谷由美子さん←亀田ひとみさん←栗田友希栄さん←ベイリー裕美さん←白鳥繁世さん←古田直江さん←大倉一元さん←伊藤京次さん

海も船も大好きな床屋さん「パーバーストップ マッチ」の店主さん。

て、仕事前や休みなんかに行つて頭のリフレッシュにもなっています。今は娘が生まれて、よく娘と一緒に行くようになりました。名古屋水族館は名古屋港の一番の人気スポットかもしれません。名古屋水族館の先にある芝生広場もとてもいい風景です。仕事が床屋なので月曜日が休みで、そうするとちょうど水族館関係の施設はみんな休みなんです。ほとんどが地元の人。みなさんペットを連れてたりして散歩しています。最近もカメラマンの方に家族写真を撮ってもらう機会があったんですが、「写真どこで取りますか?」と尋ねられて、「水族館...の裏手のプロムナードで」と。それぐらい好きで、生活の近くで海が見える風景があるっていいですよ。

て、仕事前や休みなんかに行つて頭のリフレッシュにもなっています。今は娘が生まれて、よく娘と一緒に行くようになりました。名古屋水族館は名古屋港の一番の人気スポットかもしれません。名古屋水族館の先にある芝生広場もとてもいい風景です。仕事が床屋なので月曜日が休みで、そうするとちょうど水族館関係の施設はみんな休みなんです。ほとんどが地元の人。みなさんペットを連れてたりして散歩しています。最近もカメラマンの方に家族写真を撮ってもらう機会があったんですが、「写真どこで取りますか?」と尋ねられて、「水族館...の裏手のプロムナードで」と。それぐらい好きで、生活の近くで海が見える風景があるっていいですよ。

ポップアップかわら版

港まち限定で毎月発行されている、とってもディープな「ポットラック新聞かわら版」。その取材の様子を切り抜いてちょっとだけご紹介。かわら版を読みたい方は港まちへ!



5月初め、緊急事態宣言が延長され、いつもまちを歩き、人と出会うことを大切にしてきたかわら版の取材はどうしたらいいのだろう、と悩む編集部。ウェブ会議をしてみる? でもみんな参加してくれるかなあと心配になりながらも、当日は8人のメンバーがオンライン上に集結。久しぶりの再会に喜び、あれやこれやと話が弾み、ビンゴ形式(といっても4コマですが)でまちの情報を伝える「おさんぽビンゴ」なる新企画を始めることに。ウェブ会議もなかなかいいじゃん、と大盛り上がりの編集会議となりました。

港まちごはん!

十杯目



江崎さん家

港まちの暮らしの中にある「美味しい!」を探る「港まちごはん!」今回は、「ゴーヤパーティーよ!」とにぎやかな雰囲気の中、さまざまなゴーヤ料理が登場する江崎さん家の晩御飯を訪ねました。



ゴーヤ料理は、チャンプルーだけじゃない

「夏は毎日ゴーヤなの」と江崎さん。隣まちのご実家でたくさんのゴーヤが「ぶらぶら」と育っていて、毎週もらってくるのだそう。「ゴーヤパーティー」だというこの日のメニューは、ゴーヤの豚肉巻き、ゴーヤの肉詰め、ゴーヤのガーリックライスと盛りだくさん。豚肉巻きは、細長く切ったゴーヤに豚バラ肉を巻きつけ、塩コショウで味付けし、焼くというもの。驚くほど簡単だけど、ものすごくうまい! 冷製スープゼリーも絶品で、夏にぴったりの晩御飯でした!

Comment

「実家で大量にゴーヤが採れるから、毎日食べるのが大変!」

「ゴーヤ好きなのでうれしい! でも、ゴーヤって、昔はあまりメジャーな食べ物じゃなかったよね」

「そうかも。若い頃ね、ゴーヤを新鮮なキュウリだと思って、ごはんに出したらブーイングだった笑」

「えー! キュウリと間違えますか?!」

「新鮮だからゴツゴツしてるのかなと思って」

「中身とかだいたい違いますがどね...! でも今日のごはんはみんな美味しい!」

みなとのみかた

文: 小島邦康 撮影: 三浦知也

Vol.10

港まちをロケハン(ロケーションハンティング)して出会った気になる風景を、本紙カメラマンがパチリ。デザイナーがブツブツ言います。



特集ページの取材でぶらぶら訪れたガーデンふ頭臨港緑園。うだる暑さとコロナの影響で人はまばら。ちょっと寂しげな空気が漂っていたけど、ヤシの木たちはどこ吹く風、いつも通りのディスプレイで、のんびり海を眺めているようだった。ならばこちらもひと休みと、のんびり景色をながめると、少々沈んでいた気分も、なんとなく晴れるような気がした。このヤシの木は人間が植えたものだけでなく、もともと自然というものは、とよりの植物や葉っぱと重ならないように、ちょうど良い距離を保ちながら、人間よりもはるか昔から生きてきた地球の大先輩。先輩...ステキっす! そんなことを考えていると、後輩の我々はちょっと密集し過ぎちゃったのかな?なんて思ったりします。

編集後記

今号の編集過程に携わりながら、改めて「ぱったり」について考えた。ぱったりには大きく2種類あるような気がしてきた。一つは、思いがけず知人や知っているものと出会うこと。これは嬉しい。心が一瞬にして華やき、和む。もう一つは、まだ自分の中で言葉になっていないことへのヒントに出会うこと。自分の中にある、この感覚はなんなんだろう、それが知りたくて、四方八方へ手を伸ばす。感性が全開になっている状態なのだろう。こんなときは、出会ったものから食欲にヒントを得ることができる。時に拡大解釈することもあるかもしれない。だが、それも自分という人間の一部分になっていくのだから面白い。どちらのぱったりも非常に愛すべきものだと思はる。(事務局 森)

ポットラック新聞 -the Summer- vol.10
2020年9月15日発行

企画 港まちづくり協議会
編集 竹内厚 (Re:S)
デザイン 小島邦康 (Artical inc.)
進行 岡西康太 (港まちづくり協議会)
表紙撮影 三浦知也
企画協力 Minatomachi Art Table, Nagoya [MAT, Nagoya] (青田真也、吉田有里)
印刷 東海共同印刷
発行 港まちづくり協議会
〒455-0037 名古屋港区名港1丁目19番23号
Minatomachi POTLUCK BUILDING
TEL | 052-654-8911
MAIL | info@minnatomachi.jp
WEB www.minnatomachi.jp
Facebook www.facebook.com/nagoyano.minnatomachi

港まちづくり協議会
JOINT COMMITTEE OF PORT TOWN
Minatomachi
POTLUCK BUILDING

※港まちづくり協議会は、ポートピア名古屋設置に伴い競艇を施行する自治体(蒲郡市など)から名古屋市に交付される「環境整備協力費」を用いたまちづくり事業を、住民と行政との協働により検討・実施しています。
※本紙に掲載されている内容の無断転載、転用及び複製などの行為はご遠慮ください。

旅するコラム

港まちを飛び出したバトンは誰の手に。テーマは「誰かに教えたいとっておき」です。

Vol.10

野口かおる

服部侑霞さんから←木村仁美さん←宮川哲治さん←八幡蓮樹さん←小田原のどかさん←堂端徹さん←小杉滋樹さん←渡辺英司さん←ベアート・ゾデラーさん

肌にも地球にも優しい手作りコスメレッスンや本当の自分を読み解くスピリチュアルアロマリーディングを行う。滋賀県在住。

幸せになる香りの力

香りは、生活している中で様々な所から漂ってきます。ふと漂ってくる、味噌汁、出汁、コーヒー、花などの香りが大好きです。庭に植えているハーブの葉をこすって嗅ぐ香りも、私を瞬で別の世界に連れて行ってくれるようです。精油(アロマ・エッセンシャルオイル)は

私は、環境に優しい材料でスキンケア用品、メイク用品を手作りしています。コスメには、自分の好きなアロマも加えるので、毎日使用する度好きな香りに包まれて何とも言えない心地よさです。地球が大好きなので、自然を大切にアロマ1滴も大切にしています。

100%植物から抽出されたものです。アロマは香りだけではなく、様々な成分も含んでいて、気分をリフレッシュ、リラクセスさせてくれます。虫の苦手な香りもあるため、アロマスプレーを制作し、虫よけに役買ってくれます。アロマは日本で雑貨扱いのため、気軽に手に取って頂ける機会が多いのですが、1滴がもつ力が強い(植物が濃縮されているから)、使用方法には注意が必要です。私は、環境に優しい材料でスキンケア用品、メイク用品を手作りしています。コスメには、自分の好きなアロマも加えるので、毎日使用する度好きな香りに包まれて何とも言えない心地よさです。地球が大好きなので、自然を大切にアロマ1滴も大切にしています。